

トイレットペーパー不足と世界のトイレ事情

11月10日は「トイレの日」「11(いい)10(ト)イレ」なのです。
2020年3月、トイレットペーパーがなかなか買えない。新型コロナウイルスの感染拡大で「トイレットペーパーが足りなくなる」というデマが拡散したことが原因とみられている。

日本人は当たり前のように、毎日、トイレットペーパーを使用しているが全世界でトイレットペーパーを使用している割合は何パーセント位だと思いますか？日本人の感覚だと60～70%位かな？・・・と考える人が多いのでは・・・と思います。

実は世界人口の三分の一の人々しかトイレットペーパーを使っておらずトイレットペーパー使用者は少数派、大多数の三分の二の人々は使っていないのです。何を使って、毎日、おしりをふいているのでしょうか？

トイレットペーパー・紙を使うか(紙派)、水(水派)を使うか、その他(他派)の方法です。トイレットペーパーは欧州全土、米国、そして東アジアの多くの国で好んで使われている。いっぽう、イスラム教圏、東南アジアの多くの国と南欧の一部の国では、水が好まれています。北欧の国の多くは、ほぼ1年を通して寒い。従って、水で洗うということは無理だった。そして、温水が出るようになった21世紀の現在でも、昔から受け継がれてきた紙で拭く習慣が続いているわけです。イスラム圏では、「用を足したあとは紙で拭くのではなく、水をつかい自分の体、(また場合によっては床全体も)をきちんと清める」です。伝統的には手桶に水を入れ、左手で水をすくっておしりを洗います。イスラム圏出身の方が初めて日本に来られる際は、ウォシュレットつき洋式トイレ以外を使用できないため、トイレを我慢したり場所を探したり苦労されたり、水を持ち込む場合もあるそうです。水や紙の他にも、気候や文化、様々な理由から小石や葉っぱ、毛や土、海藻、木片などを利用している地域もあります。

かつては、水と指、砂、石、ロープ、トウモロコシのひげ、ロシア葉っぱ・・・色々なものを使って処理をしていました。現在、イランの一般家庭ではトイレットペーパーはありません。右手でホースから出てくる水を出し、左手で洗って、自然に乾くのを待ちます。紙派ではなく水派です。

昔の人々は、ロープ(アフリカ・中国・日本)、樹皮(ネパール、日本(アイヌ))、ボロ切れ(ブータンなど)、海綿(地中海諸島)、苔(北極圏)、石(エジプトなど)、砂(サウジアラビアなど)、土(アラブ諸国)、土版(パキスタン、古代日本)などさまざまなものが使われてきた。

トイレットペーパーを使ったという記録でもっとも古いのは**6～8世紀の中国**のものだそうです。ほかの地域では、裕福な人々が羊毛やレース、麻などを使っていたという記録が残っています。そんなお金がなかった人たちは、枯葉やトウモロコシの芯、棒や石、さらには自分の手など、さまざまなものを使っていたそうです。

18～19世紀に、イギリス人はパリで初めて「ビデ」と出会った。パリは、イギリス人がより色っぽい生活を送るために向かっていたところだったのです。そしてビデは、パリジャンが通う売春宿や売春行為と結びつけて考えられるようになり、この考え方がアメリカにも伝わりました。

「アメリカの生活習慣の多くは、イギリス人がもたらしたものです」

トイレの世界史

古代ローマは上下水道網が発達していたことで知られています。水道の発達とともに設置されたのが公衆トイレです。その数は紀元前315年の時点で144カ所、紀元前33年には1000カ所以上にも及んだと言います。ローマの入植したトルコのエフェソス遺跡などにはその一端を見ることが出来ます。下水道が流れる上に設置された座席式の便座で、便座前に貯水槽があり、処理用の海綿が設置されていたとされています。しかし、水道整備が発達していたのは公衆トイレだけであり、個人住宅では穴のようなトイレで用を済ませていたようです。

中世ヨーロッパでは、上に挙げたような古代ローマのトイレ文化は継承されることなく、ほぼ有史以前のようになりさまたったことで有名です。路上は便の異臭がたぐい、衛生観念が失われた結果、疫病が蔓延した暗黒の時代でした。

修道院や城、宮殿にはトイレが備え付けられていたものの、ほとんどの住民は「chamber pot」と呼ばれるおまるを使用していました。それぞれの家庭のおまるがいっぱいになると、決められた場所で中身を捨てるといった決まりとなっていました。ほぼその決まりは守られておらず、ゴミと一緒に窓から投げ捨てられていたそうです。

フランスでは、ナポレオン3世が1831年の政権奪取後、パリの都市改革に臨みます。老朽化した建物の改築の他、市街地に4本の大きな下水道を建築する計画がなされ、1861年に完成します。1867年のパリ万国博では、整備された下水道が海外使節団にお披露目されています。しかし、現在のような汚水処理は未整備であり、セヌ川に汚水を垂れ流していたため、セヌ川の汚濁がひどくなり、1889年、5年間の間にトイレの水洗化が義務付けられます。このような形で、急速にヨーロッパの下水設備は整えられていきます。現在では、水洗トイレは一般化していますが、手洗い場が設けられておらず、手を洗う習慣がないなどかつての習慣が垣間見える事もあるようです。

日本のトイレの歴史

一方、日本のトイレは歴史的にみてもヨーロッパよりも比較的清潔なものだったとされています。川の流れが速い為分解速度が速く、また農耕への利用が進んだためです。

日本のトイレの先駆けは、川にせり出した棧橋で川に流すというもので、縄文時代の遺跡などで広く見る事ができますが、3世紀～4世紀にかけて屋内に川の水を導水したものが使われるようになります。これが「川屋」転じて「廁」になったという説もあります(建物のそばにあるという意味で「側屋」という説もあり)。

平安時代、貴族は漆器製の「樋殿」「樋箱」と呼ばれる携帯型トイレを携行するようになります。このトイレに立てかけられた、上に丸い棒のついた板に衣服の裾をかけて用を足していました。この「衣かけ」が転じて「金隠し」になったとされています。

鎌倉時代、二毛作が幕府に奨励されるようになると、堆肥としての利用が始まり、「閑所」汲み取り式のトイレが普及します。江戸時代、人の排泄物がほぼ堆肥として利用されるようになり、農家の住民が野菜などと排泄物を交換するようになったり、専門の人間が商売を始めるようになります。こうした再利用の手法から、江戸時代、人口が拡大した都市部においても町は清潔に保たれるようになりました。

この堆肥としての利用は明治時代まで続きますが、大正時代になると、安価な化学肥料が普及し始め、堆肥としての利用自体が少なくなってきました。戦後は衛生上の問題から堆肥としての利用が禁止され、山間部や海への廃棄が問題となります。昭和30年ごろには現在の水洗トイレが登場し、徐々に一般家庭へと普及するようになりました。

浄化槽や下水道整備が進行 (1920年～)

洋風便器が普及し始める (1959年～)

温水洗浄便座の普及 / 便器の節水化も進行(2000年～)

こうした由来からの衛生習慣と技術大国の力が合い、日本のトイレは世界に認められるほどの高性能・高品質となっています。海外から来日したセレブやハリウッドスターが日本のトイレにほれ込み、購入したというニュースはよく耳にします。他にも、多くの公衆トイレは基本的に無料で使えること(ヨーロッパでは有料が多い)や、家庭用のトイレのアクセサリーの豊富さなどにも感動すること。せっかく海外からいらっしゃるのだから、清潔なトイレでおもてなしたいですね。